

図書館だより

目次

フィレンツェのイタリア国立中央図書館	
——北村 暁夫	1
著作紹介 近衛典子・福田安典・宮本祐規子編著『江戸の実 用書：ペット・園芸・くらしの本』——福田 安典	2
著作紹介 平田由紀江・森類臣・山中千恵著『韓国ドラマ の想像力—社会学と文化研究からのアプローチ』 ——平田由紀江	3
ケルムスコット・プレス版ウィリアム・モリス著『輝く 平原の物語』（1894年版）——川端 康雄	4
爬虫類系？図書館エントランス「干支」展示 ——浜口 都紀	6
My JWULISを利用しましょう ——関覧係	7
図書館からのお知らせ	8



図書館のスロープ横に咲く紫陽花

フィレンツェのイタリア国立中央図書館

北村 暁夫

イタリアにはローマとフィレンツェの二か所に国立中央図書館があり、日本の国立国会図書館と同様に、イタリア国内で刊行されるすべての出版物の収集・保存を任務としている。いずれも、1861年にイタリアが統一されたのちに創立された。ローマは1871年以降、イタリアの首都であるから、国立中央図書館が存在するのは容易に理解できるが、なぜフィレンツェにもう一つの国立中央図書館が存在しているのであろうか？直接のきっかけは、1865年から1871年までの短い期間、フィレンツェがイタリアの首都となったことにある。しかし、ローマに遷都したのちも、フィレンツェに国立中央図書館が存続し続けたのは、イタリア文化、とりわけ言語の面で、フィレンツェや同市を含むトスカーナ地方が特異な地位を占めてきたことが大きいと思われる。

ダンテが14世紀初頭にトスカーナ方言で『神曲』を著したのに端を発し、16世紀には言語に関するさまざまなアカデミー（学術組織）がフィレンツェに誕生するなど、トスカーナ方言はイタリアの諸方言の中で頭一つ抜け出た存在であった。この流れは、イタリア統一に向かって動き出した19世紀に入っても続く。イタリアの国民作家として知られるアレッサンドロ・マンゾーニはミラノに生まれ、当初ミラノを含むロンバルディア地方の方言に基づく文体で代表作『いいなづけ』を出版した（初版1827年）。しかし、その後、トスカーナ方言こそがイタリア文学に相応しい言語であるという考えを抱き、長い時間をかけて『いいなづけ』を書き直して、ついにトスカーナ方言に基づく版を完成稿として出版するにいたった（1842年）。また、イタリア統一後にも、イタリア料理（という概念）の生みの親として知られるペツレグリーノ・アルトゥージが、フィレンツェで1891年に『料理の科学と美食の技』（邦訳『イタリア料理大全』平凡社、2020年）という書物を自費出版している。彼はもともとトスカーナ地方に隣接するエミリア・ロマーニャ地方の出身であるが、フィレンツェに移住してからトスカーナを中心としてイタリア中の料理のレシピを集めて一冊の書にまとめたのである。同書は一世帯に一冊は必ずあると言われるようなベストセラーとなり、この書によって地域ごとにさまざまな方言で呼ばれていた食材や料理の名称がトスカーナ方言をベースに統一されていったとされている。

このように、トスカーナ地方の出身ではない人々がトスカーナ方言にひとかたならぬ敬意を抱いた結果として、フィレンツェはイタリア文化の中心に位置する都市とみなされたのである。それこそが、現在でもフィレンツェに国立中央図書館が存在し続けている大きな理由であると言えよう。

（図書館長・史学科教授）

著作紹介

近衛典子・福田安典・宮本祐規子編著『江戸の実用書：ペット・園芸・くらしの本』 福田 安典

本書は「江戸の実用書」というタイトルであるが、いわゆる「実用書」の解説本ではない。むしろ実用に役立たない作品や内容を扱っている。というのも、江戸の書物には現代の基準でいうところの実用書／文学書の区別が明確にできないものが多い。それらはかなりの点数を数えることができるが、文系の側からも理系の側からも振り向きもされない現実がある。本書を上梓した動機である。

例えば有史以来、日本人は犬と仲の良いパートナーであったことはよく知られている。ところが現代に通行するもの、首輪、リード、シットダウン（お座りの号令）、ペットフード、多くの用語が明治期以降の「舶来物」である。「その以前の日本人はどのように犬と接していたの？」「昔もワンちゃんは病気に罹ったはずだがどんな治療をしていたの？」という素朴な疑問に答える書物がない。

江戸時代に^{あかつきのかねなり}曙鐘成（寛政5年（1793）-万延元年（1861））という犬好きの人気作家がいた。彼の作品の一つに『犬の草紙』というのがある。一般的に「古典文学」とみなされるかもしれない。しかしながら、この本は不思議な体裁と内容を持つ。まず表紙が通常ではない。なんと犬の毛皮を模しているのである。犬の毛皮の触感を持つ書物、世界的に稀書といっ^{じあい}てよいであろう。内容も古今の犬について文献を渉猟して載せている。そして最後に「犬狗を養ふ慈愛の心得」という飼いや病気の治療法が記されている。この作品はまさに江戸のペット本なのである。そこに記される犬についてのあれこれは、読書家ではなく愛犬家にこそ読まれることを待っている。

本書ではこの江戸のペット本を最初に紹介し、ついで江戸の園芸書、そしてくらしの本をわかりやすく紹介した。

江戸期はガーデニングがブームとなった。「金のなる木」が比喻ではなかったほど人々は^{おもと}万年青、菊、椿、楓などに熱中した。本書でアサガオを中心に取り上げている。先ほどの犬と日本人との関係もそうだが、われわれが日常と認識しているものの中には意外と知らない歴史やドラマがある。アサガオはその好例である。「変わりアサガオ」の世界はなんと奥深い^{ちんみょう}掬がりを持っていることか。メンデルの法則が一般に知られていなかった頃に、偶然にも朝顔の交配により変な朝顔が咲くことに気づいた江戸の人、たちまち愛好家が溢れ、そこにビジネスが加わり、世界的にも珍しい今日のアサガオの風景が^{ひでんかきょう}現れたのである。

また中国清代の陳扶養が著した『秘伝花鏡』（1688）という作品がある。日本の園芸書に大きな影響を与えたのだが、そのきっかけとなったのが平賀源内による^{かいしえんがでん}施訓であることは案外知られていない。実用書のように思われるが、『秘伝花鏡』の作者は一癖も二癖もある風流人で、その隠逸世界の実現のための栽培法を説いたのである。彼は日本絵画に影響を与えた『芥子園画伝』や、上田秋成『雨月物語』に影響を与えた『西湖佳話』にも関わっている。園芸という農学部あたりで扱う素材を本書で詳述しているのである。その書物（漢文で書かれている）を平易に解して本書に収録した。

江戸の暮らしとしては、女性の書法や行儀作法などを説く「女訓書」を取り上げ、そこに記された生活の知恵から興味深い記事を紹介した。本書では日本女子大学の大学院生を中心に若手に素材を^{せいこかわ}採んでもらい、不便ながらも何か不思議で楽しそうな庶民の暮らしぶりを活写した。

本書で扱った書物、執筆陣はすべて日本古典「文学」関係者であるが、そこから紡ぎだされた世界は果たして「江戸の実用書」と銘打てるものなのか、看官のご意見を賜りたく思います。

（日本文学科教授）



著作紹介

平田由紀江・森類臣・山中千恵著『韓国ドラマの想像力—社会学と文化研究からのアプローチ』 平田 由紀江

韓国ドラマというと、どのような作品が思い浮かぶでしょうか？

韓流という言葉とともに、日本で韓国ドラマ『冬のソナタ』が流行してから20年が経ちました。

2003年頃の『冬のソナタ』とヨン様ブームからはじまり、K-POPの流行、韓国コスメやファッション、料理など日常文化の拡がり、そしてコロナ禍におけるステイホームの後押しを受けて話題となった、韓国の大手芸能プロダクションであるJYPエンターテインメントと日本のソニーミュージックによるオーディション番組『Nizi Project』やドラマ『愛の不時着』に至るまで、「韓流」すなわちポピュラー文化を中心とした韓国文化のグローバルな流行現象は、一過性のブームを超えて日本社会に広く浸透しました。日韓のコラボレーションも盛んに行われています。

この20年のあいだに、日本における韓国や韓国文化に対するイメージは大きく変わりました。ある人々にとっては、イメージが変わったというより、イメージがなかったところに具体的な映像がやってきたと言うこともできるかもしれません。

その一方で、この20年は、韓国社会において、グローバル化による格差の拡大、青年失業、ジェンダー不平等などの社会問題が活発に議論された時期とも重なります。そして、それらの社会問題をさまざまなかたちで取り入れたドラマも数多く制作されました。ドラマ制作を取り巻く環境も大きく変化しています。

また、その視聴方法についても、テレビ放送の時間に合わせて視聴またはそれを録画したり、DVDをレンタルしたりすることは減り、ストーリーミングで時間に束縛されることなく視聴することが主流となりつつあります。NetflixをはじめとするグローバルOTTの拡がりには、視聴方法だけでなく、作品制作や作品のあり方にもさらなる変化をもたらしています。

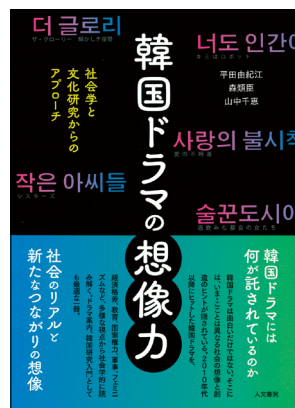
こうした変化を念頭に置きつつ、本書は、2010年以降に放映された韓国ドラマ作品を、社会学・文化研究の観点から分析したもので、大きく「Ⅰ 境界を超える想像力」「Ⅱ 格差をめぐる想像力」「Ⅲ 権力を問い直す想像力」「Ⅳ “つながり”への想像力」というセクションに分かれています。分析対象としたドラマには、朝鮮半島分断を背景としたラブロマンスで、第4次韓流ブームの中心にもなった『愛の不時着』をはじめ、教育格差問題を扱った『SKY キャッスル 上流階級の妻たち』、ウェブトゥーンを原作とし、軍事文化をテーマとした『D.P. 脱走兵追跡官』、シングルマザーの生き方を描いた『椿の花咲く頃』などが含まれます。

ドラマはフィクションだということが大前提ですが、ある特定の社会や時代のさまざまな状況を反映していると同時に、つくり手の想像力が発揮される場でもあります。そこには、つくり手が思い描く、ある種の「希望」（そして時には「絶望」も）が垣間見えたりもします。ドラマを観ることは、娯楽であることはもちろんですが、そこに描かれた場所、時間、社会について思考を巡らせる機会でもあり、さらにはその社会と自分との共通点や差異を認識するきっかけにもなるでしょう。それゆえに、本書は韓国社会や文化について知るための入門書でもあります。

著者3人が定期的に話し合いの場を設け、それぞれの担当する作品についての分析を披露したり、研究会で報告したりするなど対話を積み重ねて本書は完成しました。視聴した後に、他の誰かとあれこれそのドラマについて話し合うのも、ドラマ視聴の醍醐味のひとつではないでしょうか。

ここに書かれているドラマ分析がすべてというわけではなく、分析の仕方は人それぞれ異なると思います。本書が、韓国ドラマが織りなす世界、ひいては韓国文化・社会へのひとつの入り口となれば幸いです。

(現代社会学科教授)



ケルムスコット・プレス版ウィリアム・モリス著『輝く平原の物語』（1894年版）

川端 康雄

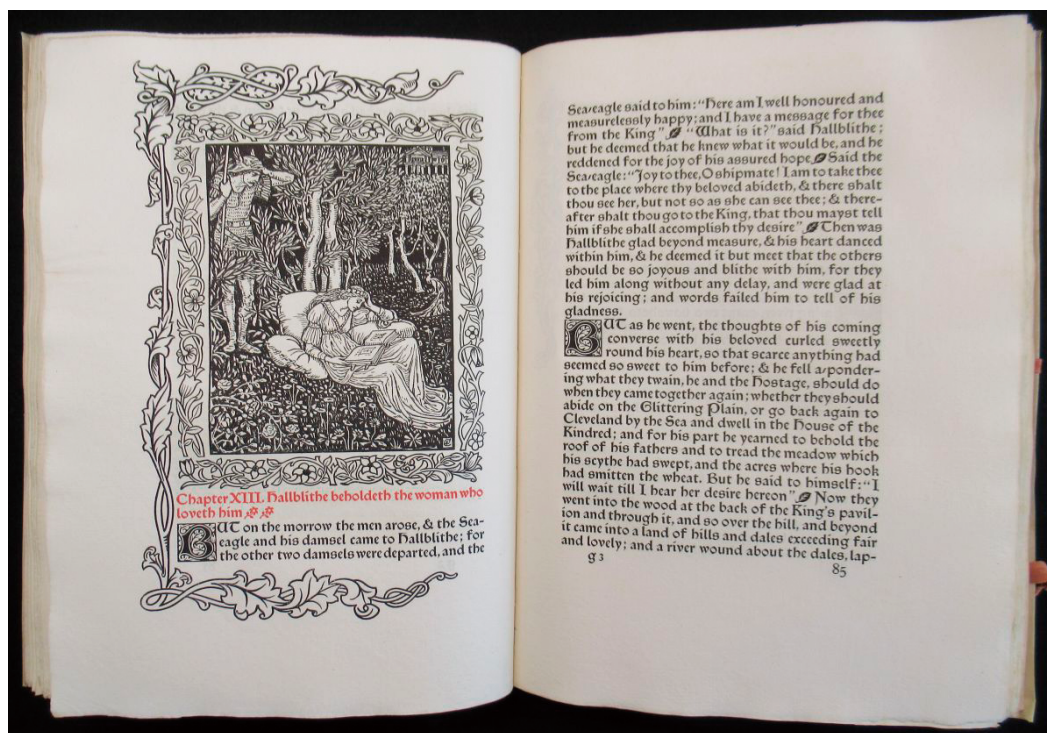
前号で紹介したケルムスコット・プレス（以下、KP とも略記する）の最初の刊本である『輝く平原の物語』（1891年）は挿絵を附さずに出されたのだが、1894年にウォルター・クレイン（1845-1915）による挿絵入り版で新たな KP 刊本として出された。今回はこれについて書きたい。

まずクレインの経歴を簡単にまとめておく。クレインの名前を知る多くの人はヴィクトリア朝イギリスの三大絵本作家のひとりとして（ランドルフ・コールデコット、ケイト・グリーナウェイとともに）親しんでいると思われる。彫版師エドモンド・エヴァンズとの協働で1864年から1876年にかけて刊行した「トイ・ブックス」（『六ペンスの歌』など、伝承童謡やおとぎ話を本文にした3色刷木口木版絵本のシリーズ）が評判となり、30代ですでに子ども絵本の挿絵画家として名声を確立していた。ただし、クレイン自身はその分野でのみ評価されることには抵抗を覚えていたようだ。なにしろ芸術家クレインの仕事には本格的な油彩画があるし、壁紙やテキスタイルのデザインなど装飾芸術の作品がある。1887年に結成されたアーツ・アンド・クラフツ展覧会協会の初代会長となり、展覧会の組織者としてこの重要な工芸運動に多大な貢献をなした。その名前にちなんで1880年代に興隆する一連の工芸運動をアーツ・アンド・クラフツ運動と総称するのだが、この運動の最大の影響源がウィリアム・モリスであった。クレインは（11歳年長の）モリスと1871年に初めて会って以来、モリス商会での仕事（パレス・グリーン1番地ハワード邸のフリーズ制作）を請け負うなど、モリスとつねに近い距離にいた。装飾芸術面のみならず、モリスの政治活動にも共鳴し、1880年代の社会主義運動においてもプロパガンダ用のカートゥーンなどを多く供給した。街頭デモに参加することもあり、1877年11月のトラファルガー広場での集会が警察と軍隊によって弾圧され死者3名を出した「血の日曜日」事件にも居合わせていて、回想記にその模様を記録している。

KPについても、準備段階でモリスの相談に乗っていたことがわかっている。1889年11月初旬、モリスはクレイン、エマリー・ウォーカー、そしてコブデン＝サンダースンとともにスコットランドで講演旅行をしていた。その際、グラスゴーのホテルでモリスはKPを立ち上げる相談をした。クレインによればこれがKPの企画の最初であったという。ただし、その一年前、第一回アーツ・アンド・クラフツ展でウォーカーが「活版印刷と挿絵」と題する講演をおこなったのをモリスが聴講し、それが自身で活字デザインを手がけるきっかけになったとされているので、KPの起源はその時点に遡ることもできる。その場合でもクレインが会長として同席していたのであり、KPの発足に関与していたという事実は変わらない。のみならず、最初のKP刊本『輝く平原の物語』の挿絵をモリスはクレインに依頼していたのだった。下絵が待ちきれず、結局挿絵なしで簡素なオーナメントのみでそれを出すことになった次第は前号で述べたとおりである。

KP刊本のうちで、唯一例外的に同一作品を二度刊行したのはこれだけである。それはクレインに挿絵を依頼しながら自己都合でそれを使わずに刊行してしまったことの埋め合わせだったと言える。KP発足間もない1891年2月12日付のクレイン宛の手紙で、大型の印刷用紙が間に合わないため、とりあえず挿絵なしの小型本で『輝く平原』を刷ることに決めたこと、また依頼したクレインの挿絵は没にするのではなく、いずれ挿絵入り版で出すつもりなので諒とされたい、という趣旨のことを述べている。「とにかく一刻も早く〔KPを〕始めたくてたまらないのです」（I am red hot to begin）という文言に印刷所稼働へのモリスの強い意欲（と性急さ）が窺われる。

「『輝く平原の物語』挿絵入り版製作の企画案」というモリス自筆の文書が残っていて（米国シラキューズ大学蔵）、「挿絵はウォルター・クレインによって描かれ、レヴァレット氏ほかによってウォルター・クレインの満足のいくように木版にされる」、「同書はケルムスコット・プレスにてウィリアム・モリスのオーナメントを附して印刷される」という文言に加えて、「売り上げから経費を差し引いた純益は上記ウォルター・クレインとウィリアム・モリスとのあいだで折半する」と記されている。KPの最大の挿絵画家バーン＝ジョーンズにはこのような措置は取らなかったわけであり、これは破格の待遇であったと言えるだろう（この取り決めによってクレインは少なくとも150ポンドの報酬を受け取った）。KPの構想段階で相談相手のひとりであったという点でクレインに恩義を感じていたという事情もあったのかもしれない。挿絵入り版の書誌データは以下のとおり。



ウィリアム・モリス著『輝く平原の物語』（ケルムスコット・プレス、1894年）。84-85頁。活字トロイ・タイプ、挿絵ウォルター・クレイン、装飾頭文字と縁飾りのデザインはウィリアム・モリスの手になる（所蔵：日本女子大学図書館）

KP 書目第22番『輝く平原の物語』（*The Story of the Glittering Plain*）モリス著。4 折判、192頁。トロイ・タイプ（本文）、チョーサー・タイプ（目次）。二色刷。木口木版題扉付。木口木版挿絵23点ウォルター・クレイン画、A. リヴァレット彫板。薄ヴェラム装。紙刷本250部。ヴェラム刷本7部。奥付日付1894年1月13日。KP より1894年2月17日発売。価格5 ギニー（紙刷本）、20ポンド（ヴェラム刷本）。

KP 書目第1番と同一作品で表題も同じだが、サイズは二倍の大きさになっている。前者も4 折判ではあったが、そちらは印刷用紙が全紙サイズ16×11インチ（406×279mm）の（桜草の透かし模様入りの）「フラワー」（1）紙だったのに対して、第22番はそれを倍にした「フラワー」（2）紙を用いているからである。こちらは縁飾りをふんだんに使っている。

クレインの挿絵自体はどのように評価できるだろうか。満を持して刊行したにもかかわらず、従来の評価はいにく芳しくない。刊行直後に本を贈呈された友人の建築家フィリップ・ウェップはモリス宛の手紙で、クレインの絵が本の他の要素（活字、オーナメント、用紙など）とそぐわず、不出来であると指摘した。KP 研究の第一人者ウィリアム・S・ピーターズンは「KP の挿絵本のなかでこれはもっとも精彩を欠く本となった」と言う。クレインの自著であれば、その繊細で優美な筆致が生きるのだが、モリスの中世風の濃い本文とは齟齬が生じてしまう。クレインは概ね黒い地に白インクを使って描いており、その下絵がリヴァレット（クレインの従弟）によって機械的に木版にされてしまい息苦しい雰囲気醸し出してしまった（ピーターズン『ケルムスコット・プレス』1991年）。モリスはクレインには直接言わなかったものの、不満であったことを秘書のコッカレルに告げている。現代の読者、とくにクレインの絵を好む人を見ると、あるいはまた違った印象を抱くのかもしれない。この挿絵入り版のファクシミリ版が出ていて、いままそれなりに受容されているからである。ともあれ、活字と挿絵のバランスをいかに取るか——その点でモリスが晩年も試行錯誤をしていたことを示す一例として本書を考えることができるだろう。（文学部名誉教授）

爬虫類系？ 図書館エントランス「干支」展示

浜口 都紀

エントランススロープでの干支に関する展示は、2023年の癸卯（みずのとう）から始まった。十二支の最初（「子」）から始められればよかったのだが、2020年はコロナ禍への対応で展示にまで手が回らなかったのが実情である。図書館の展示には、ひとつのテーマに対していろいろな切り口があることをお知らせする、そのテーマについて図書館にどんな資料があるのかなるべく広く紹介するという目的があり、この時はうさぎを巡るさまざまな資料を展示した。

続く2024年の干支は甲辰（きのえたつ）、2025年は乙巳（きのとみ）であったが、架空の動物である龍や、一般的に人好きがするとはいえない蛇をどのように扱うか、少々悩むところではあった。結果として、辰年については龍を身の回りで探してみる展示、巳年については神話や伝説、宗教の中で象徴として現れる蛇についての展示を行うことになった。

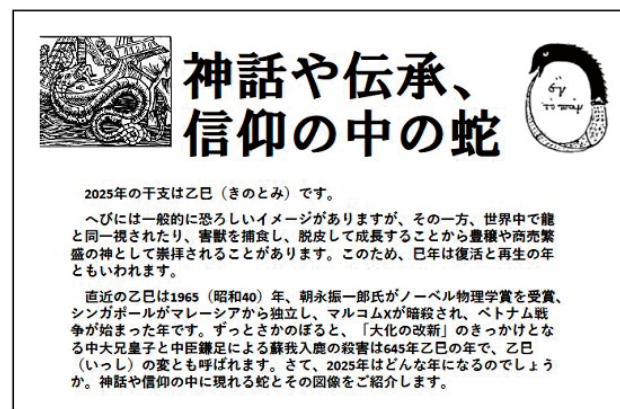
「ドラゴンはどこにいる」（2024年1月9日～2月24日）

コモドドラゴンやタツノオトシゴ、リュウゼツランなど「龍」にまつわる名前を持つ実在の動植物の、画像を含む紹介や、ヨーロッパ、中国、日本における伝統的な龍の特徴とそれを表した絵画やデザイン、多くの人が慣れ親しんでいる現代の童話や物語に登場するドラゴンたちを展示した。

架空の生き物とはいえ、世界中の文化に古くから登場する存在としての龍を「探す」には、少々物足りなかった感もある。翌年の「蛇」とのかかわりや、ことわざ、故事などについても触れられればよかったと感じている。



「神話や伝承、信仰の中の蛇」（2025年1月8日～2月7日）



現実の蛇の生態や種類などを展示すると「怖い」と感じる人が多いかもしれない。古来より邪悪な存在とされる一方で、脱皮して成長することなどから豊穡や再生、知恵の象徴ともなる両義的な存在であることを紹介したいと考え、様々な民族の神話に登場する蛇や、旧約聖書の創世記でイブを誘惑する蛇、八岐大蛇をはじめなぜかいろいろな数の頭を持っている蛇の画像などを取り上げた。

なお、来年2026年の干支は「丙午」となる。ここまで十二支に対応する動物をメインに展示を行ってきたが、そもそも「干支」とは十干と干支を組み合わせ、60年を周期とするものである。次の展示は十二支とは少し離れた切り口で行うことを予定している。楽しみにお待ちいただきたい。

My JWULIS を利用しましょう

4月に入学された新入生の皆さんもそろそろ大学生活に慣れ、課題やレポートで図書館を利用する機会も増えてきたのではないのでしょうか？ここでは、図書館で提供している「My JWULIS」の主な機能をご紹介します。学部学生・大学院生のみなさんは、JASMINE アカウントのユーザ名とパスワードを入力して、My JWULIS を利用します。

☐ My JWULIS サービスの主な内容

- 自分の現在の利用状況の確認
図書館からの通知、貸出状況、予約状況、貸出履歴の確認等
- 貸出更新（返却期限日の延長）
 - ・1資料あたり1回行うことが可能
 - ・次の予約がある場合、または延滞図書がある場合は貸出更新できません
- 貸出中図書の予約
OPAC から貸出中図書の予約や取り消しができます
- 西生田保存書庫所蔵図書の図書館への取り寄せ手続き
資料の配置場所が「西生田保存書庫」の場合、OPAC から取り寄せ手続きができます
- OPAC 検索結果の「ブックマーク」への保存

※詳しい使い方は、図書館 HP をご確認ください。(https://lib.jwu.ac.jp/lib/RG.html)

【初回利用時のお願い】

メールアドレスの登録をしましょう

予約図書・取り寄せ図書到着通知、その他図書館からのお知らせをメールで受け取るためにはメールアドレスの登録が必要です。JASMINE-Navi への登録とは別に、My JWULIS へ登録する必要がありますので、ご注意ください。

<図書館 HP より My JWULIS へ>



< OPAC 検索結果より My JWULIS へ>

西生田地 区	西生田保 存書庫	377.28 Nih	31601374	配架済	0件
					予約

< My JWULIS ログイン画面>

利用者認証

利用者ID(または登録名)およびパスワードを入力してください

利用者ID(または登録名)

JASMINEアカウント

パスワード

ログイン

< My JWULIS 画面>

利用状況一覧

マイフォルダ

利用状況一覧

日本女子大学図書館システム JWULIS から

図書館からの通知はありません。

貸出

借りている資料 0冊

延滞資料はありません。

予約

予約をしている資料 0件

予約中の資料はありません。

複写依頼

複写依頼をしている資料 0件

受取可能な資料はありません。

(館員・閲覧係)



図書館からのお知らせ



図書館の動きを皆様にお知らせし、一層ご活用いただけるよう、2024年度の主な取り組みをご紹介します。今後もさらなるサービス向上に向け、取り組んでまいります。

○概況

4月に読売新聞の取材を受け、5月22日朝刊の連載記事「知の館 大学図書館を巡る」に本学図書館が掲載された。設計者の意図の他、開架式の特徴や卒業生の利用についてなど、特徴を多面的に取り上げていただいた。

感染症対策として、泉会の援助で行われる在学生への郵送貸出（片道郵送費負担）は2024年も継続し、30通の利用があった。

卒業生グループおよび学外からの見学は192件の申し込みを受け付け、来館者は1000人を超える（入学課比率による高校生の見学を含まない）。海外からの来訪も64件を数え、開館して5年が経過しても妹島和世氏による建築への注目は続いている。

○学術情報リポジトリ

システムの基盤となるソフトウェアのバージョンアップに伴い統計の取り方に変更が生じたため、単純な比較は難しいが、昨年度比でダウンロード数が約1.8倍と増加している。

本学の同窓会である桜楓会が発行していた『家庭週報』の明治時代発行分について、日本文学科の渡部教授のグループが作成した総目次を登録した。更に桜楓会とも交渉を重ね、本文の画像データを成瀬記念館の「デジタルアーカイブ」で公開するに至った。またこれにあわせて大学公式HPの「研究」ページに「デジタルコンテンツについて」の項目を追加するなど、大学が発信するデジタルコンテンツへのアクセス向上を目指している。

○電子図書館 LibrariE（ライブラリエ）を利用した学生選書

ライブラリエはタブレットやスマートフォン、PC等で一定期間「借りて読む」ことができる学生向け電子書籍サービスである。2022年度後期より学生入館者の投票により購入タイトルを決めており、2024年度は前期「LGBT・SOGI（性の多様性を理解する2）」「世界遺産・建築遺産」「平安時代・平安文学へのいざない」「戦争と平和」という4つのテーマに対して355票の投票があり、36タイトルを購入した。後期は「生成AI」「防災・防犯」「20代に向けた本」「30分で読めるシリーズ」の4つのテーマに156票の投票が寄せられ、45タイトルを購入している。

○展示

昨年度末より引き続き「貴重書『源氏物語』展示～目で見て、読んで楽しむ『源氏物語』」を5月30日まで、「新しいお札の3人」（7/1～8/31）、「神話や伝承、信仰の中の蛇」（1/8～2/7）をエントランス・スロープで行った。

○ラーニング・コモンズさくらの活動

各専攻からの推薦を受けた延べ10名のラーニング・サポーターが活動し、79件の相談を受け付けた。ラーニング・サポーターによるオンラインミニ講座も計4回開催、71人が視聴した。

編集後記 巻頭言は新館長にお迎えした北村暁夫先生による。この4月、当館では実に約四半世紀ぶりとなる新入職員も迎えた。また、本号より編集委員も新たなチームで臨む。新館開館から6年めとなる今も、連日のように国内外を問わず多くの見学者が訪れるが、何より学生の皆さんにとって居心地の良い図書館でありたい。（水嶋）

2024年度実施した利用者向け講習会

1年次オリエンテーション

遠隔（動画を作成しLMSにて公開）による実施

教員からの依頼等により授業時間内に実施

計46回775名参加

児童 6回48名、食物 2回13名、
被服 4回26名、日文 4回134名、
英文14回176名、史学 5回123名、
社会福祉 6回114名、教育 1回22名、
文化 4回119名。

この他、1学科にテキストを提供した。

図書館主催で実施

・新大学院生オリエンテーション
→図書館HPにスライドを掲載